

Lend a Hand
手を貸そう国際ロータリー第2750地区多摩東グループ
東京多摩グリーンロータリー・クラブ

Weekly Report



クラブ会長テーマ 手を貸そう! そして強く握ろう!

2004-4-7 第647回例会 NO.14-36 2004-4-21 発行

◎司会 SAA委員会 根本 泰守

樹林にて開催いたしますので、各委員長は御出席願います。委員長欠席の場合は代理の方の出席をお願いします。

◎点鐘 会長 大松 誠二

◎国歌斉唱

◎多摩青年会議所「恒例・わんぱく相撲」案内

ロータリーソング「奉仕の理想」

5月22日(土)開催

ソングリーダー 吉沢 洋景

多摩青年会議所 理事長 馬場 孝幸 様

◎お客様紹介 会長 大松 誠二

専務理事 岡田 一枝 様

- ・東京国立 RC カウンセラー 秋廣 道郎 様
- ・青少年交換学生 Oliver Dewey Charles 君
- ・多摩青年会議所 理事長 馬場 孝幸 様
- ・ " 専務理事 岡田 一枝 様
- ・ " 副専務理事 阿部 綾 様

副専務理事 阿部 綾 様

◎会務報告 会長 大松 誠二

ロータリーの「四つのテスト」をもう一度、読み直してみましょう。好意と友情を深めようと呼びかけています。意見の違いは認め合って、それでも会員は大きな目標(奉仕と親睦)へ向かって、もう一度心を合わせていきたいと思えます。改めて、会員増強の推進をお願いします。また欠席の多い会員へ声を掛けていただきたい。



【委員会報告】

◎幹事報告 幹事 藤本 吉文

4月11日(日)の親睦旅行には集合時間厳守願います。

(14日の例会は11日に振り替えです)

回覧：東京稲城RC週報、サルガド展の奨学生の感想文、多摩市社会福祉協議会より社協法人化30周年記念福祉バザーへの協賛のお礼(チャリティー収益総額は¥448,237-)
日韓親善会議報告書

◎次年度会務報告 次年度会長 菊池 敏

本日例会後(pm1:35より)被選理事会を事務局において開催します。

4月21日pm6:00より第2回被選クラブ協議会を

出席委員会 杉田 誠

◎出席報告

- ・会員総数 43名
- ・出席義務者数 42名(出席免除者1名)
- ・出席者数 30名
- ・欠席者数 12名(事前MU2名)
- ・出席率 76.19%
- ・欠席者：足立潤三郎、萩生田政由、萩生田茂夫、平野 行廣、加藤喜三郎、北村 幸彦、小林 正、菅井 信夫、澄川 昇、田島真由美、高木 淳光、高野 範城
- ・補填MU：小城 章員 4/6 東京立川こぼしRC
高木 淳光 4/7 被選理事会
田島真由美 4/2 東京町田RC

3/24 最終訂正出席率 80.95%

東京多摩グリーンロータリー・クラブ事務局

東京都多摩市落合1-43 京王プラザホテル多摩561号
TEL 042(372)6463 FAX 042(372)6491
E-mail tamagrc@cello.ocn.ne.jp

【例会場】京王プラザホテル多摩・たまつばき4階

【例会日】●毎週水曜日12:30 ●月の最終例会18:30

【会長】大松誠二 【幹事】藤本吉文

【クラブ会報委員長】赤尾恭雄 【副委員長】正房正孝

【委員】遠藤二郎・平野行廣・佐伯和廣・澄川昇・高木淳光・由井眞司・小田泰機

◎ニコニコBOX 親睦活動委員会 内田 吾

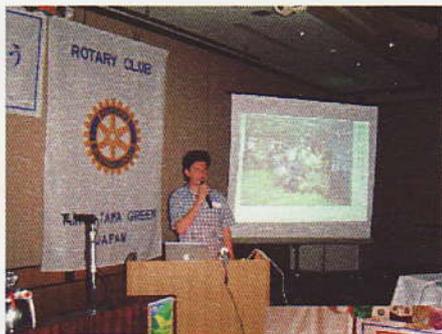
- 大松 誠二 メキシコからのお客様、ようこそ。日本の春を楽しんでください。
- 藤本 吉文 メキシコの青少年交換来日学生オリバー・デュウェイ・チャールズ君のお話、楽しみです。
- 赤尾 恭雄 チャールズ君、卓話を楽しみにしています。
- 菊池 敏 お客様、ようこそ。
- 藤原 正範 暫く休んで申し訳ありませんでしたので・・
- 伊澤ケイ子 桜ふぶきのトンネルを気持ちよく走りぬけ(車) できました。
- 村上 久 旅行、雨が降らないよう“私、祈ってます。”
- 小林 和夫 近頃、ヒグレニナルトナミダガ出ルノヨ。青イホールノシャンデリアガ恋シクテ。
- 津守 弘範 桜満開でやはり春は良いですね。移動例会は残念ですが欠席で・・・
- 伊藤 英也 お茶代のつり銭です。
- 高村 弘 先日は誕生祝ありがとうございました。
- 関岡 俊二 3月誕生祝ありがとうございます。4月8日はお釈迦様の誕生日です。

本日の合計¥16,500 (累計¥710,061)

◎卓話 「メキシコと私の家族、生活の紹介」

青少年交換学生 Oliver Dewey Charles 君
(ホストクラブ：東京国立RC)

カウンセラー秋廣道郎様の学生紹介後、スライド映像



を交えて母国の家族や学生生活を来日後数ヶ月で覚えた日本語で語る。



◎点鐘

会長 大松 誠二
(例会担当：遠藤 二郎)

ポール・ハリスを我々の心に！ Part 42



予定の放浪期間の5年にはまだ3ヶ月残っていたが、弁護士を開業するために、ポールはシカゴに来た。

当時のシカゴは大変不景気だった。ポールは景気の悪いことは予想はしていたが、放浪している時より悪いとは思わなかった。ポールは不景気を乗り切る

エキスパートだと思っていたので、貧しいながら自分の才覚を駆使したつもりだった。しかし、弁護士開業には予想以上の困難に会った。弁護士の看板を出すことは容易なことだった。その看板が大勢の目にとまるとも思わなかったが、まさか無視されるとは思いもしなかった。お客は全然来なかった。

裁判所の実務になれるために、裁判所に行って夜遅くまで訴訟記録や判例を相当長時間に亘って読んだが、相変わらずお客は来なかった。他の若い弁護士とも話してみたが、うまい手はなかった。彼等の中には資産を持っている人や有力な親戚、友人を持っている人もいたが、ポールのように悪戦苦闘している人もいた。その悪戦苦闘の結果、やがてポールは弁護士協会、記者クラブやボヘミアン・クラブの会員になったり、商業会議所でも活躍するようになった。

しかし、ポールは都会生活の中で非常に寂しい思いをしていた。特に休日や日曜日には恐ろしいほど孤独感に襲われた。形式抜きで友達付き合いしたり、若い人達と知り合う方法はないものかと考えた。

ポールは望郷の念にかられて故郷に帰ってみた。昔、お世話になったジョージ伯父さんがラトランド駅まで出迎えてくれ、馬車で家まで連れて行ってくれた。伯父さんはまだ医者をやっていたが、寄る年波で万事暢気にやっていた。

ラトランドに着いて翌日、従兄弟のマティーと一緒に馬車でウォリングフォードに出掛けた。クリーク通りを行くと、どの曲がり角にも昔の思い出が滲んでいた。あの10月、祖母の葬列が通っていたのもこの道だったのだ。

ポールは、その日、ウォリングフォードの旅館に宿を取り、友達と旧交を温めたり、思い出の場所を訪ねたりした。オッター川の鉄橋のそばにあった水遊び場、素敵な思い出のフォクス池、「氷の床」、チャイルド川、付近の丘や山には全部行ってみた。勿論、少年時代を過ごした我が家、祖父母が眠るグリーンヒル墓地は言うまでも

なく、すべての思い出を辿ってみた。

(コーナー担当：赤尾 恭雄)

ポール・ハリスを我々の心に！ Part 43

シカゴに戻ったポールは、相変わらず屈辱に甘んじなければならなかった。平日にはガッカリすることもあったが、良いことが一つあった。それは仕事の忙しきで自分のことを考える暇がなかったことだった。しかし、日曜日など休日には寂しくて身を持って余した。日曜日の朝は下町の協会に行けば気も紛れたが、午後はずっと独りぼっちで、故郷のニューイングランドの谷間の緑や優しい旧友の声を思い出していた。市内の公園を散歩しても、公園は人工的で、行き交う何千という人々の中に一人として顔見知りはなく、ポールの心は満たされなかった。知らない人ばかりが集まっている所にいると、無限の大地や大海原の中に放り出されたような寂しさに襲われた。どんな有名な音楽を聞いても気分は晴れず、徒に故郷の自然と人々の暖かさを思い出すだけだった。

ある日、ポールはミシガン湖横断の船遊びに参加してみたが、船は大人や子供で満員のため解放感を味わうことはできなかった。ドイツ料理、スカンジナビア料理、イタリア料理などのレストランで食事をしていても満足感はいえなかった。たまに知り合いはできても本当の友達にはできなかった。

ポールには大切なものが一つ欠けていた。それは心を許せる真の友達だった。哲学者エマーソンは「千人の友達を持っていても、一人も手放すことはできない」と言っているが、シカゴに居を構えたポールには千人はおろか友達は一人もいなかった。

ポールは考えた。この大都会シカゴには、自分と同じ境遇の人が何百何千といつて同じ経験をしている。彼等が自分と同じように友達を求めているなら、そこから何かが生まれるはずだと思った。

ある晩のこと、ポールは同業の知人に誘われて郊外にある彼の家を訪ねた。夕食後、二人で散歩に出掛けたが、店の前を通るたびに、彼は店の主人と名前を呼び合って挨拶をしていた。ポールは、はたと、ニューイングランドのウォリングフォードのことを思い出した。同時に、この大都会シカゴで、各種の職業から政治や宗教の立場を離れて、お互いの意見を大らかに認め合えるような人を一人ずつ選んで親睦団体を創ったら、という構想が浮かんだ。もし、このような団体ができれば、お互いに助け合える筈だと思った。

(コーナー担当：赤尾 恭雄)

『ロータリー知識』 入門編 『私観 ロータリー精神』 金森徳次郎

《ロータリーの友創刊号に論説として書かれたもので、筆者は東京南ロータリークラブ(昭和25年8月創立)の初代会長を務められた方です。》

ロータリー・クラブに入って3年、ロータリーとは何か、未だ十分に心に染み込まないが、書物も読み、地区大会にも参加し、内部の活動を見、外部からの批評も聞いて一貫精神を感じない訳ではないが、何となく混沌として統一の無いものを感じる。私達が今やっていることが非常に表面的なところを動いているだけではないか、ロータリーの理念にひたむきに飛び込んでいると言えるであろうかとの疑惑が常に身につきまとう。理想と現実との違い、国情や社会事情の違いで画一性を計ることの無理があり、結局大きく唱えて、小さく行ふのそしりは免れないようです。旦那の昼食会かと錯覚または、悪評もある。然し私が最もロータリーの好きな点…他にどんな欠点があっても、ロータリーが好きな点…は奉仕の精神です。私はロータリーの玉の中、奥深くに「奉仕の理想」の火の玉があり、その外側に無数の「奉仕の種」が浮いていて、それは共に動き、流れて、あの夜空の星のようなものを想像しています。その「奉仕の種」の一つ一つが中心の「奉仕の理想」に焦点をあわせているのです。

ポール・ハリスも申して居ります。

この世の中は常に変遷する。我々は変遷する世界と共に変遷する用意がなければならない。ロータリーの物語は幾度も、幾度も書き替えなければならないであろう。「奉仕の種」は時と共に動き、変わるでしょう。然し、その中心の火の玉「奉仕の理想」はかわらないのです。

(ロータリーの友創刊号より)

(コーナー担当：遠藤 二郎)

★「ロータリーの友」拾い読みコーナー★

4月号 《言いたい聞きたい》より

『ロータリーの友』を読んでいますか？

東京八王子南RC 坂本 俊雄 氏

クラブ雑誌委員長会議を、年に一回、開かれる地区は多いと思います。「今まで『友』を読んでいなかったが、雑誌委員長に任命されたので、やむを得ず読むようになった」という出席者も多いようです。いざ読んでみれば、このすばらしい『友』を、入会以来読まなかったのが悔やまれるという半面、『友』はロータリーの機関紙・情報誌なのに、“雑誌”とは何事だ」とか「表紙にも何と

く抵抗感があるし、左開きは横組、右開きは縦組で構成がよくない」という声も耳にします。こうした意見への回答は、『友』二〇〇三年一月号（『友』誌創刊五十周年記念号）に詳細に述べられています。表紙は、発刊当初から工夫が続けられていることがわかりますし、伝統的な俳句や和歌の掲載には、縦書きが優れているものです。『友』の縦組みは会員からの投稿文が主で、会員自身がつくり、会員自身が盛り上げるページ、横組みは国際ロータリー（R I）からの指定記事やガバナー座談会、ガバナー、R I 理事、各地区委員長らの情熱にあふれた文章で埋まっています。横組みは主に、ロータリーについての情報や解説などがその内容なのです。一九五二（昭和二七）年、日本のロータリーが拡大のため第六十地区（東日本）と第六一地区（西日本）に分かれた時、西地区ロータリアンの意思の疎通・共通のロータリーの機関紙・情報誌として『友』は発刊されました。敗戦後、窓ガラスもなく、床がでこぼこな焼け跡のビルの一室で、先人の編集委員たちが『友』の編集に努力し、出来上がったという経緯をもつ機関紙・情報誌（雑誌）です。当時、神戸・大阪・岐阜・仙台からの編集委員は電化していない汽車に乗り、トンネル内で顔を煤で真っ黒にし、十四～十五時間かけて編集委員会に集まり、ロータリアンにふさわしい雑誌にしようと懸命でした。それから五十一年間、北海道や九州から集まった編集委員とスタッフ、約六〇人で伝統と歴史ある『友』を編集し、毎月発行しています。「読まれざるベストセラー」などと言わずに、ぜひ、一度目を通してみてください。

（コーナー担当：高木 淳光、正房 正孝）

【85才を迎えた私とロータリー・クラブ】その2

2002年6月10日 記

和歌山ロータリー・クラブ 竹中 泰三 様

和歌山女子刑務所携帯乳児に関する奉仕活動は、井関久楠会長、私が社会奉仕委員長の時だったが、昭和29年7月1日付で当時の小原法務大臣から和歌山ロータリー・クラブに感謝状を頂いており、大臣からの感謝状は後にも先にもこれが一度だけで、頭から離れません。

そもそもこの奉仕活動の発端になったのは、刑務所長で、故三田庸子所長が日本で初めての女性の所長でした。その三田所長と私の姉が、日本女子大学で同じ学校だったため、姉と共にお目に掛かりに行ったのが赤ちゃんに対する奉仕の始まりでした。

最初に始めた奉仕は、赤ちゃんの「おむつ」作りでした。戦後のためか純綿の布が少なく、私が自転車で会員のお宅をまわり、浴衣のお古を頂き、それを浜寺にいる姉と家内が「おむつ」の大きさに切り、ミシンで「おむ

つ」を作り刑務所へ持って行ったのが、私個人の奉仕の始まりでした。

その後も三田所長との関係で、夫を殺した殺人犯の仮出所をお手伝いに雇ったこともあり、刑務所内の女子囚人を全員講堂に集め、ロータリー・クラブとは如何なる会かを、30分間ほどお話しした経験もあります。

私は65才頃より不治の眼病の「網膜色素変性症」が出始め、現在は前方だけはよく見えるのですが、左右上下は7度か8度くらいしか見えず、真っ暗です。

そのため、ロータリーの会合を始め、他の会合にも出席できず、ただ30年近く早朝に歩き続けている和歌山城公園の道だけは、何とか歩けるので助かっています。

しかし、一番残念なことは、お世話になったロータリーにご恩返しが出来なくなったことですが、最近では耳も遠くなり困っていますが、補聴器は私には合いません。

奉仕活動のできぬ会員は、真のロータリアンでないから退会すると堤君に言ったら、あなたは個人的に財団法人「竹中養源会」という立派な育英事業をやっているではないか、と退会を止めてくれた堤君に感謝のほかない。

「竹中養源会」は源助親父が創ってくれて、昨年で60周年になり、私が引継いでからでも40年にもなり、利用していただいた学生諸君はOBと一緒にすれば800人を超えましたが、これもロータリーの故小中パストガバナーや故広田善八さんが役員をさせていただいたお陰であり、それ以後、中谷 弘さんにも役員をいただき、現在では堤さん、島村安昭さんのご両人にも役員になっていただいているお陰であります。

再びロータリーの話に戻りますが、1961年、ロータリーインターナショナルの世界大会がアジアで初めて開催されることになり、東京の晴海に決定した。

その前、1960年、米国フロリダ州マイアミで世界大会があり、初めて開催される東京大会に一人でも多く参加していただくために、日本全国から約50名のロータリアンで参加することになり、私は我がクラブの故鳴神さんと白浜の故田中一也君と共に渡米した。私にとっては初めての渡米だったため、色々なことがありました。以前に、例会でお話しさせていただいた記憶があるので省略させていただきますが、当時、ハワイ空港は木造建物だった時代で、飛行機を待つのに外でベンチに座って待った頃の話です。

さて、1961年の東京晴海の世界大会で最も感激したことは、昭和天皇、皇后両陛下が我々ロータリアンの会場にご臨席いただいたことで、40年間経った今でも頭に焼き付いている事柄の一つです。（次々号に続く）

（コーナー担当：赤尾 恭雄）